



技術の基本は“好奇心”

わたなべ やすみつ
渡邊 泰充

東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 特別顧問(現、ベトナムベンルック〜ロンタン高速道路施工管理プロジェクトマネージャー)

1948年生まれ。兵庫県出身。1971年清水建設株式会社入社。コンクリート橋梁設計エンジニアとして従事。2010年ベトナム南北高速道路 Resident Engineer。2014年より東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 特別顧問。2015年8月より現職。自称エッセイスト。

インタビュー日：2015年4月20日

聞き手：玄間千映子、三嶋信広、山登武志

「技術」には足跡がある

なぜ「橋」なのか？

小学校の時の将来の夢は「野球選手」でした。父が建築家だったのですが、私は土木を選びました。30代の時、現場の設計係員として、会社としても初の長大橋プロジェクト、月夜野大橋に携わりました。それがきっかけで橋梁の道を歩んでいます。

海外プロジェクトとしては、清水建設時代はベトナムのバイチャイ橋やドバイのPC橋建設に携わり、定年退職後は発注者側のエンジニアとして、ベトナムのPC橋の建設に携わりました。「橋」は構造物の中でも、広範囲な地域をドラスティックに変容させる力があります。目の前の仕事に没頭している内に、気がついたら橋に特化していた、というのが正直なところですよ。

海外から見えてくる「日本」

1992年、マサチューセッツ工科大学に会社の制度を活用して短期留学しました。この時日米文化の違いとして、米国は「他人に何かを施す文化」、日本は「人に迷惑を掛けずに生きていく文化」ということを感じました。留学は短期間でしたが、文化の違いから眺める視座の獲得は、その後の海外プロジェクトに携わる際に、立ち戻る原点の一つになっています。

これから土木も海外プロジェクトが増えてくると思いますが、積極的に学校のインターンシップ制度や企業の留学制度等を活用し、生の体験として日本と海外との共通点や違いを習得しておくことは重要です。それは必ず、現地での現場力の発揮に役立つと思います。

学生に伝えたいこと

ベトナム赴任時代に何度か現地視察に来られた東大の先生方との縁で、現在、東大の大学院生を相手に英語で週二回教鞭を取っています。そこでは、「土木工学実践講座」と称して私のエンジニア的思考、価値観、判断の拠り所などを伝えています。

エンジニア的思考とは、「現象から原因をたぐり寄せること」です。私が現場でぶつかったトラブルをケースとして、学生たちに「自分ならどうするか」、「それはなぜか」を考えさせる授業を行っています。

「トラブル」は、その事象の背景にある何かを見落とすことから生じます。たとえば、何かの「基準」があったとします。それぞれの基準には、それぞれの生まれた背景というものがありま

委員会からのメッセージ

渡邊泰充さんは、橋梁技術の第一人者として国内外で活躍されるだけでなく、土木技術者として思い、感じることを、エッセイ集「つれづれ窓」の出版や様々なメディアを通じて発信されてきました。ご定年後も「生涯現役」という信念で、楽しく精力的に活躍されるお姿は、当企画に相応しいと考え、お話をお聞きしました。

す。その背景を知っておかないと、基準通りにいかない事象が起きた時、どうすればいいか分からなくなってしまいます。そういう力をつける基本は、ものごとの背景にまで踏み込んで知ろうとする「好奇心」だろうと考えます。

「技術」の要件って何ですか？

技術には理屈があり、理屈は層をなすものです。その層が様々な事象の原因に遡ることを可能にします。それが大工など感性依存度の高いとされる、「技能」との違いだと考えます。土木を経験工学と言う人もいますが、そういう意味で、経験を理屈（技術）で裏打ちさせておく必要があると思います。そうするとトラブルを未然に防ぐこともできるし、適切な再発防止策が立てられると思います。

基準やマニュアル、スペックの背景まで含んだ理屈の積み上げがきちんと出来ていると、問題が生じたときの対処も早くできます。阪神淡路大震災の時、JRは短期に復旧しましたが、民間電鉄は随分時間がかかりました。組織が抱えている技術者の技術力の違いだと感じました。

仕事と人生

資格取得は「経験の棚おろし」

清水建設に在職中、社内の基礎技術試験制度や土木学会の資格試験制度の構築を手がけました。いずれも、学校を卒業した、または何年かの実務経験があるというだけで、本当に自分の知

識・理屈にぬかりはないかを問うものです。それまでの実務経験の卒業証書のようなものが「資格」だと思います。そういう意味でも、資格は取った方がいいと思います。

技能の場合は、師匠一弟子間の伝承は意味があります。けれども技術は先達を超えるべきものです。そのために先輩のマネをし、先輩から学ぶのです。

先輩から学ぶのは、その理屈の生まれた背景であり、いいものを世に遺そうという強い意志です。

背景まで踏み込んで理屈を咀嚼するのは、存外時間を喰い、すぐには効果をもたらさないことが多いのですが、それをどれだけ抱えているかによって、大きな技術力の差となります。資格の取得は、そうしたことを整理するツールにもなると思います。

ご自分の人生をどう評価しますか？

会社員時代には気づきませんでした。ベトナムで仕事をしたときに、つくづく技術で生きてゆくことの面白さを知りました。会社の看板を外し、自分の顔で仕事ができることが楽しいのです。土木技術者も住民や作業員の命を預かっています。その意味では医者と同じです。

この度、前回ベトナム赴任時と同じ発注者から、プロジェク

トマネージャーとして来ないかというオファーをいただきました。大学との約束はまだ2年あるのですが、大学のご理解を得て、これを引き受けることにしました。この年齢で働ける職業を選んだこと、またその体力が残っていることは、本当にラッキーだったと思います。

幾つまで現役ですか

家訓は「生涯現役」「生涯勉強」です。父も仕事を持ちながら、他界しました。だから私も、体が許す限り仕事に関わりたと思います。

現在、清水建設の草野球チームに加えてもらっていますが、67歳で野球ができるのは有り難いことです。丈夫な身体で生んでくれた両親にも感謝です。

いろんな人生観の人がいるけれど、私は土木が好きだし、橋を架けることが好きです。だから、後半の人生で「趣味に生きる」ということはありません。

後輩に伝えることなんて、おこがましいこと考えたことはありません。皆、自分の人生、好きなようにやるのが一番だと思います。若い人達の何人かが、私の人生を楽しそうだなと思ってくれればこんなに嬉しいことはありません。

（文責：玄間千映子）

インタビューを終えて（聞き手から）

大学での教鞭も任期半ばにして、この8月から再度、越南のプロジェクトに参画されるという渡邊さん。ベトナムでは、現地エンジニアの育成もやりたいとのこと。東大で会得した教育法を実践したいのだそうです。どうぞ現地の方々に、日本の品質管理の思想は、命を預かる医者と同じマインドだと云うことを伝えて下さい。